

S01 特別講演

タイにおけるものづくり企業の現状と展開 ～今ある技術・必要な技術からスターリングへ

講演者：相川 英一 氏 (Kulthorn Kirby Public Co. Ltd.技術顧問)

講演者略歴

- 1970年：九州工業大学(機械工学科)卒業。
- 1970年：東芝へ入社(1999年からは東芝キャリア社)
 - ・以来一貫して冷蔵庫やエアコン用のコンプレッサーの事業に従事。
 - ・この間、台湾東芝精密社の董事を兼務(1999 --- 2005)
 - 中国広東美芝社の副董事長を兼務(2000 --- 2006)
- 2004年：日本機械学会技術賞受賞(ヘリカルブレード式コンプレッサーの開発)
- 2005年：日本機械学会 フェロー
- 2006年：工学博士
- 2007年：東芝キャリア社を定年退職。
三光ライト工業社(携帯電話のプラスチック筐体製造)に入社。
- 2012年：三光ライト工業社を退社。
- 2012年：(タイ)クートンカービィ社入社、今に至る。

講演概要

タイ製造業の特徴の1つは『先進諸国からの技術導入に満足している』ことである。これは海外から導入した技術を磨き上げて発展してきた台湾、韓国、中国との大きな違いである。そして、この『満足している』という感覚は『依存する』という感覚と表裏一体で、様々な場面に通底している。

タイ人が主体となって解決すべき環境問題も、先進国に頼ろうとする雰囲気がある。第一の支援者は『一带一路』政策を開始した中国である。アセアンへの影響度を上げたいとの意欲は大である。低価格商品の次にインフラ整備を世界中の国々へ提供し始めたのがその証左である。しかし環境問題を根幹から解決する能力には疑問がある。中国には環境問題が山積みされているからである。それに比べ、日本はオイルショックや、大気汚染、河川汚濁、大災害などを経験し、解決してきた。これらの事実は誇りであり財産である。環境問題解決こそが日本のアセアン支援の最大のものである。

CO₂排出規制など多くの環境問題が俎上に上がっている。それらはエネルギー問題が根源である。『省エネ』だけでなく『エネルギー生産』がクローズアップしてきているということである。タイは天然ガス田を有しているが、外国資本が入っていることや、枯渇の可能性があることなどから、再生エネルギーへの関心が高まってきている。特に太陽光発電は日本と同様に脚光を浴びている。ところが日本の太陽光発電については、電力の買取価格、集中豪雨での設備損壊、送電回路の不足などの問題が浮上し、現実視されているのは中小規模の発電だけのようなのである。また太陽光パネルは中国製が多く、市場を席卷している。社会基盤であるべきエネルギー生産は、それぞれの国の存続に大きく関わるものであり、太陽光や中国製パネルに過剰の期待を寄せるのは危険である。そこで、風土に見合う、風力、地熱、バイオマス、など様々な自然エネルギーの活用が検討されている。

【スターリング】に期待している。タイには多くの自動車関連の日本企業が進出しコンプレッサーメーカーもあり、スターリングのエンジン部分の製造は不可能ではないと思う。さらに、米を主食とするアジアであれば、燃料としての籾殻は『カーボンニュートラル』という理論的魅力と無尽蔵に供給できるという実用的魅力がある。すなわち、魅力的なビジネスモデルなのである。